



2019年11月23日(土)@早稲田大学西早稲田キャンパス



# 日本品質管理学会 第49回年次大会報告講演

会長 棟近雅彦

1



## 報告内容



1. 品質不祥事への対応
  - 「品質立国日本再生」に向けての提言
    - JSQCへの提言
    - 各界への提言
2. 学会名称変更に関するアンケート結果
  - アンケート結果
  - 今後の課題
3. 学会誌/論文誌の在り方検討WG中間報告
  - 現状の課題
  - インパクトファクター
  - 変革へのロードマップ
  - 今後の課題

2



## 品質不祥事への対応

Waseda Univ. Prof. M.Munehika

3



## 品質不祥事と品質マネジメント



1999年	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 臨界事故</li><li>・ 医療事故(肺手術患者, 心臓手術患者の取り違い)</li><li>・ 医療事項(消毒液と血液凝固阻止剤の取り違い)</li></ul>
2000年	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 自動車メーカーのリコール隠し</li><li>・ 食品メーカーの食中毒事件</li><li>・ 医療事故(エタノールと蒸留水の取り違い)</li></ul>
2002年	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 食品メーカーの牛肉産地偽装</li><li>・ 銀行統合に伴う大規模システム障害</li></ul>
2005年	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 構造計算書偽造</li><li>・ 湯沸器メーカーの不正改造に起因した死亡事故</li></ul>
2007年	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 牛肉ミンチの品質表示偽装</li><li>・ 菓子メーカーの消費期限偽装</li><li>・ 料亭の産地偽装, 賞味期限偽装</li></ul>
2015年	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 杭打ち工事データ改ざん</li><li>・ 免震データ改ざん</li><li>・ エアバッグ欠陥</li></ul>
2017年	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 自動車メーカーの無資格検査</li><li>・ 素材メーカーの品質データ改ざん</li><li>・ 新幹線車両の台車破損</li></ul>

Waseda Univ. Prof. M.Munehika

4



# 品質不祥事と品質マネジメント



## ◆品質不祥事

- 意図的，悪意のある，不正
- 非意図的，悪意のない，チョンボ

## ◆いずれも品質不祥事である

- 顧客に迷惑をかける
- 両者では原因が異なる場合もあるが，共通のものもある

## ◆「よい品質の製品」を出すためのマネジメント

- 逸脱行為が起こらないようにするマネジメントも含む



# 2018年2月21日緊急シンポジウム



- ◆ 「品質立国日本を揺るぎなくするために」
- ◆ 中條武志(日本品質管理学会顧問，中央大学教授)
  - 「データ改ざんの問題は，品質管理の問題よりも過剰なスペックの要求にあるのではないか？さらにはその結果として生じたダブルスタンダードゆえの問題ではないか？」
  - 過剰な要求やダブルスタンダードをなくす
  - 科学的なものの見方・考え方に基づいて問題・課題を顕在化させ，解決していく取り組みを，組織・社会として促進する
- ◆ 佐々木眞一(日科技連理事長，トヨタ自動車(株)顧問・技監)
  - プロセス保証の推進
  - 自動化，自工程完結
- ◆ 揖斐敏男(日本規格協会理事長)
  - 三現主義の重要性
  - 標準化の推進，規格の活用
- ◆ 小原好一(日本品質管理学会会長，前田建設工業(株)会長)
  - 品質経営の推進
  - 革新戦略と基盤戦略
- ◆ 棟近雅彦(日本品質管理学会副会長，早稲田大学教授)
  - 「まず自分自身で考える」
  - 監視する仕組み，監査・ISO 9001認証の活用
  - 品質経営における経営層の役割

( )内は当時の肩書き



## まず自分自身で考える



- ◆ 対策を追い求める前に，自組織について，なぜ不祥事が起きるかを考えてみる
  - 不正をやりたいと思っている人はいないはずだから，必ず理由がある
- ◆ 早稲田大学
  - 研究費不正利用問題
  - 論文不正，改ざん，ねつ造
  - レポート剽窃，カンニング
- ◆ プレッシャー，誘惑，魔が差す
  - こうなる何かがある



## 監視する仕組み



- ◆ 人間は弱い
- ◆ 少しで(少しが)よいから監視の目が必要
  - 24時間監視する必要はない
  - 内部監査，外部審査
  - AI, IoTの活用
- ◆ 少しでないと著しく効率が下がる



## 品質経営における経営層の役割



- ◆ もっとも大事なものは、トップがどう考え、どのようにリーダーシップをとり、どのような背中を見せるかである。
  - 大半の社員は、ビジョン、中計、方針の下で、上司の指示に従って仕事をするのだから、自明のことである。
  - 組織風土、文化を作る大きな要因である。
- ◆ ほんとうに品質中心の経営をやっていますか？ そのつもりになっているだけではないですか？



## JSQC品質不祥事対応WG



- ◆ 目的
  - 一連の不祥事に対して、JSQCとしてやるべきこと、発信すべきことを提案する
- ◆ メンバー
  - 平林 良人\*((株)テクノファ)
  - 浅羽 登志也((株)IJイノベーションインスティテュート)
  - 斉藤 忠((株)岡谷電機)
  - 永原 賢造(プロセスマネジメントテクノ)
  - 古谷 健夫((株)クオリティ・クリエイション)
- ◆ 49年度は実行部隊として新メンバーを加えて継続



## JSQC品質不祥事対応WG



### ◆ 各界への提言

- ①企業における品質経営の推奨
  - 社長のリーダーシップによる方針管理の推進
  - 標準化及び日常管理の推進と徹底
  - 小集団改善活動の推進
  - 品質管理教育の強化
- ②小中学校から大学までの品質管理教育の強化
  - TQM（総合的品質管理）教育の実践
  - 品質管理は科学的活動であるが、倫理の遵守教育も含む

### ◆ JSQCへの提言

- 様々な団体に向けての品質不祥事対応強化の働きかけ
- 特に、社長に品質問題に関心を持ってもらいたい
  - CQO(Chief Quality Officer)または品質管理の経験を持つ取締役の任命
  - コーポレートガバナンスコードに「品質」を入れる



## JSQC品質不祥事対応WG



### ◆ データ改ざん・法律違反問題の要因

- ① 社長と現場とのコミュニケーションの欠如
- ② 現場のリソース（人員，資格者，設備など）不足
- ③ 育成・教育（法律教育，人材教育，倫理教育）などの手抜き
- ④ 不都合なことに真正面から向き合わない企業文化
- ⑤ 社長のコンプライアンス意識不足
- ⑥ 規格外でも使用品質に影響しなければ問題なしという倫理観
- ⑦ 企業創立時の理念，ビジョンの変質
- ⑧ 企業収益第一主義の蔓延



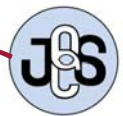
## JSQC品質不祥事対応WG



- ◆ データ改ざん・法律違反問題への対応
  - ① 社長は、自ら現場へ出向き現場の意見を聴き、実態を知る。
  - ② 社長は、現場の実態を知ることから現場のリソース（人員、資格者、設備など）不足に手を打つ。
  - ③ 担当役員は、法律教育、人材教育、倫理教育などを計画し実践する。
  - ④ 取締役は、不都合な情報こそ上げろと部下に指示を出す。
  - ⑤ 社長は、内部通報制度を促進し、コンプライアンス重視の風土を醸成する。
  - ⑥ 現場は過剰品質となる規格改定の声（報告）を上げる。規格改定が承認されるまでは規格外品は出荷しない。
  - ⑦ 社長は、企業創立時の理念、ビジョンを蘇らさせ、必要に応じて修正をする。
  - ⑧ 社長は、企業収益は品質確保の結果に得られるものであることを徹底する。



## JSQC信頼性・安全性計画研究会の品質不正チェックリスト



- ◆ 「品質」誌Vol.49, No.3, 2019から連載開始(全7編の予定)
- ◆ 「品質関連不正の未然防止強化に関する提案(その1：自動車関連を通じて)」
- ◆ セルフチェック項目の提案



## セルフチェック項目



1. コンプライアンスの徹底
2. リスクマネジメントプロセスの整備と実施
3. クライシスマネジメントプロセスの整備と実施
4. 日常管理の確実化のための現場実態把握によるマネジメント(風通しのよい組織づくりと運営)
5. 絶えざる改善活動の促進
6. 内部通報制度の効果的運用
7. 内部統制ガバナンスを常に機能させ改善する
8. 不正根絶の組織風土づくりは人づくり



## JSQC創立50周年に向けた学会名称変更に関する会員アンケートについて（速報）





## 本アンケートの趣旨



- ◆ 品質＝不具合がないことへの強い危機意識
  - － 品質がよい＝顧客要求を満たす＝顧客価値の提供
- ◆ 製造現場だけでなく，全員参加（TQMの基本思想）
- ◆ 本学会の使命
  - － 経営の中核をなす「品質」の意義，重要性を世の中に訴え，昨今の厳しい経営環境の激しい中でも競争優位の原動力となる品質管理・マネジメントの学理を追究すること
  - － 品質管理の目的である顧客価値創造を具現化する方法論の研究開発とその普及
- ◆ 学会名称変更のみでの解決は困難だが，そのきっかけづくりにはなる



## アンケート実施概要



- ◆ 時期：2019年8月末から9月末
- ◆ 方式：Webアンケート
- ◆ 対象者：準会員/公共会員を除く正会員
  - － 登録されたメールアドレスへの送信
  - － 賛助会員は個人として回答
- ◆ 主な質問内容
  - － 学会名称を変更したほうがよいか
  - － 日本語，英語名称のどちらかまたは両方をどう変更したほうがよいか
  - － その他，自由記述



# アンケート



学会名称に関するアンケート調査

Q：学会名称を変更したほうが良いですか？

- 01. 変更しないでよい：その理由
- 02. 変更したほうがよい。

○2-1. 日本語名称のみを変更したほうがよい：その理由

名称候補

- 日本品質マネジメント学会
- 日本品質経営学会
- 日本顧客価値創造学会
- 日本品質学会
- その他 ( )

○2-2. 英語名称のみを変更したほうがよい：その理由

名称候補

- The Japanese Society for Quality Management; JSQM
- The Japanese Society for Customer Value Creation; JSCVC
- The Japanese Society for Quality; JSQ
- その他 ( )

○2-3. 日本語・英語名称両方ともに変更したほうがよい。その理由

日本語名称候補

- 日本品質マネジメント学会
- 日本品質経営学会
- 日本顧客価値創造学会
- 日本品質学会
- その他 ( )

英語名称候補

- The Japanese Society for Quality Management; JSQM
- The Japanese Society for Customer Value Creation; JSCVC
- The Japanese Society for Quality; JSQ
- その他 ( )

学会名称変更について、その他ご意見がございましたら、お書きください。



# アンケート実施結果（全体）



◆アンケート依頼送付数 1384

– 正会員 1270（全体の91.8%）

– 賛助会員 114（全体の8.2%）

◆有効回答数 1102（回答率79.6%）



## アンケート結果（全体）



### ◆Q1 学会名称を変更したほうが良いですか？

回答	カウント	比率
変更しないでよい. (A1)	640	58.1%
変更したほうがよい. (A2)	442	40.1%
回答なし	20	1.8%
合計	1102	



## アンケート結果（全体）



### ◆Q2 変更しないでよいとのご回答の理由をお伺いしても宜しいでしょうか。

回答	カウント	比率	
回答あり	534	83.7%	638人中の比率
回答なし	104	16.3%	638人中の比率
合計	638	99.7%	640人中の回答率

※変更しないでよいとの回答は合計640名



## アンケート結果（全体）



### ◆頂いた意見の一部

- 名称が浸透しており，変更の必要性を感じないから
- 名前が分かりやすい，現在の学会名が浸透or定着しているから.
- 学会の名称を変えることよりも，品質の定義を啓蒙した方がよいから.

上位50位までの単語を見てみると，“シンプル” “伝統” “馴染みやすい” “違和感ない” “変えたら不便” “検討が不十分” “周知されているから” が多く見られた.



## アンケート結果（全体）



- ◆Q3 変更したほうがよいとお答えの方には，さらに日本語名称，英語名称のいずれを変更したほうが良いかをお答えください。

回答	カウント	比率
日本語名称のみを変更したほうがよい. (A1)	61	13.8%
英語名称のみを変更したほうがよい. (A2)	25	5.7%
日本語名称・英語名称ともに変更したほうがよい. (A3)	356	80.5%
回答なし	0	0.0%
合計	442	



# アンケート結果（全体）



◆Q4 日本語名称の提案をお願いします。

回答	カウント	比率
日本品質マネジメント学会 (A1)	145	34.9%
日本品質経営学会 (A2)	67	16.1%
日本顧客価値創造学会 (A3)	31	7.5%
日本品質学会 (A4)	120	28.8%
日本クオリティマネジメント学会	6	1.4%
日本質マネジメント学会	3	0.7%

※上位 6 位までを表示



# その他の回答



- ◆ 日本質づくり学会
- ◆ 日本質学会
- ◆ ものづくりマネジメント学会
- ◆ クオリティ・マネジメント学会
- ◆ 日本マネジメント学会
- ◆ 日本業務品質マネジメント学会
- ◆ 日本TQM学会
- ◆ 日本プロセス品質マネジメント学会
- ◆ 日本TQM管理学会
- ◆ 日本品質データ科学会
- ◆ 日本クオリティ推進学会
- ◆ 日本クオリティ学会
- ◆ 日本品質保証学会
- ◆ 日本品質研究学会
- ◆ 日本品質向上学会
- ◆ 全日本品質協会
- ◆ 日本統計的品質マネジメント学会
- ◆ 日本産業品質学会
- ◆ 日本品質保証学会
- ◆ 日本品質統計学会
- ◆ 日本経営品質学会 日本品質保証学会
- ◆ 品質管理学会
- ◆ 日本経営品質学会
- ◆ 顧客満足の仕組みを考える学会
- ◆ 日本質管理学会
- ◆ 日本クオリティ・コントロール学会
- ◆ 日本質経営学会
- ◆ 日本経営学会
- ◆ 日本品質活動推進学会
- ◆ 日本質創造学会
- ◆ 日本品質創造学会
- ◆ 日本価値創造学会
- ◆ 日本顧客価値管理学会
- ◆ 日本品質価値創造学会
- ◆ 日本質価値創造学会
- ◆ 日本創造的品質管理学会
- ◆ 品質創造経営学会
- ◆ 新価値共創学会
- ◆ 日本経営学会



## アンケート結果（全体）



### ◆Q7 英語名称の提案をお伺いします。

回答	カウント	比率
The Japanese Society for Quality Management (JSQM) (A1)	193	50.9%
The Japanese Society for Customer Value Creation (JSCVC) (A2)	38	10.0%
The Japanese Society for Quality (JSQ) (A3)	118	31.1%
The Japanese Society for Quality Creation (JSQC)	2	0.5%

※カウント2以上までを表示



## その他の回答



- ◆ JQ か JQM
- ◆ The Japanese Society for Quality Creation (JSQC)
- ◆ for Management based on Quality
- ◆ Japan quality production society
- ◆ Japanese Society For Quality Creation and Control (JSQC)
- ◆ Society for Value Creation to the Next (SVCN)
- ◆ The Japan Quality Activity Promotion Society
- ◆ The Japan Society for Quality
- ◆ The Japanese Society for Management (JSM)
- ◆ The Japanese Society for Creating Customer Value from Quality
- ◆ The Japanese Society for Creative Quality Control (JCQC)
- ◆ The Japanese Society for Customer Value Management (JSCVM)
- ◆ The Japanese Society for Industrial Quality
- ◆ The Japanese Society for Management
- ◆ The Japanese Society for Management Quality (JSMQ)
- ◆ The Japanese Society for Process Quality Management
- ◆ The Japanese Society for Quality and Data Science
- ◆ The Japanese Society for Quality and Performance Excellence or The Japanese Society for Quality
- ◆ The Japanese Society for Quality Assurance (JSQA)
- ◆ The Japanese Society for Quality Statistics (JSQS)
- ◆ The Japanese Society for Quality Technology and Management
- ◆ The Japanese Society for Quality Value Creation (JSQVC)
- ◆ The Japanese Society for Total Quality Management (JSTQM)
- ◆ The Japanese Society for TQM
- ◆ The Japanese Society for Value Creation(JSVC)
- ◆ The Society of Quality-Creating Management
- ◆ The Japanese Society for Quality Facilitation



## まとめ



- ◆会員の皆さんからの多数の回答，意見が得られた．ご協力に感謝申し上げます．
- ◆頂いた回答・意見をもとに，49期に理事会で慎重に検討を行う．



## 学会誌・論文誌あり方WG 中間報告



## 学術界を取り巻く状況



### ◆大学間の国際競争の激化

- 大学の「ランキング」の重視
- KPIとしての大型プロジェクト研究と論文の数
  - KPIに貢献する教員が採用・昇任に有利

### ◆学術雑誌間の競争の激化

- Impact Factor (IF)などの指標による雑誌のランキング
  - 著名な論文誌データベースに収録されないと、学術雑誌としての存在が国際的には認められない
    - IFが付与されるのは、クラリベイト・アナリティクス社のWeb of Scienceというデータベースに登録された雑誌のみ



## 日本品質管理学会を取り巻く状況



### ◆「学」の品質管理研究者の減少

- 大学内で高い評価を受けやすいのは、KPIに資する「革新的」な「大型プロジェクト」で開発される固有技術

### ◆品質誌への論文投稿数の減少・下げ止まり

- 論文を投稿できる研究者がそもそも少ない
- 和文論文は価値を認めてもらいづらい

### ◆TQS(Total Quality Science)は会員向け

- TQSは国際的には認知されていない
  - そもそもTQSは会員外にはオープンにしていない





## 学会誌・論文誌あり方WG



### ◆ 目的

- 学会内外の動向を踏まえ、本会の研究者が安心して、活発に活動できることに資する会誌の在り方を探る

### ◆ メンバー（50音順）

- 伊藤誠（学会誌編集委員長）(WGリーダー)
- 黒木学（TQS編集委員長）
- 鈴木知道（副会長）
- 鈴木秀男（研究開発委員長）
- 渡辺喜道（論文誌編集委員長）
- 山田秀（前TQS編集委員長）
- 金子雅明（庶務担当理事）
- ※ 会長，事務局もWG会合に同席

### ◆ 活動

- 本年度，5回のミーティングを実施
  - 現状の理解，IFとは何か（2回），戦略立案，ロードマップ検討



## 検討結果



### ◆ 会誌の在り方としての方針

- TQSを，IFを取得できる雑誌へと育てていく
  - 論文誌を評価する指標としてIFで本当に良いのか，という議論はありうるが，ここでは知名度や分野をまたがる共通性などを踏まえ，IFにフォーカスする
- 和文の学会誌，論文誌は現状を維持
  - 学会誌編は，学会内の活動を会員の皆様に周知する（プッシュ型の）コミュニケーションツールとして位置付ける
  - 論文誌編は，主に企業の技術者など，和文として論文を発表することに価値を見出せる方向けに残す

### ◆ 今後の課題

- TQSをIF取得できるようにするためのアクションの落とし込みとその確実な実施



## IFとは何か， どうすれば取得できるか



- ◆ IF (Impact Factor) とは
  - ある雑誌に掲載されたある論文が，一年間に引用された平均回数
  - Web of Scienceのうち，工学系では， Science Citation Index Expanded (SCIE)というデータベースに収録されると，IFがつく
  
- ◆ SCIEに収録されるための評価の観点
  - Basic Publishing Standards
    - Peer reviewであること，出版倫理が適正であること，定期的に刊行されていること， など
      - 被引用回数を増やすために，ジャーナルとして戦略的に自己引用を増やす（その雑誌に投稿した著者に，その雑誌の別の論文の引用を強要するなど）ということは倫理にもとる行為
  - Editorial Content
    - SCIEに含まれていない分野であるか，新たに発展してきた分野であるか，非常に活発な分野であること（差別化が重要）
      - 関連するジャーナル（一部）
        - » Journal of quality technology (ASQ)
        - » Quality and reliability engineering international (WILEY)
        - » Quality engineering (TAYLOR AND FRANCIS)
  - International Focus
    - 著者， editor， editorial advisory boardの国際的多様性
      - 当該分野で，国際的に，この雑誌の重要性が認識されていること
  - Citation Analysis
    - 出版，引用が活発であること
      - 当該分野で，国際的に，この雑誌の重要性が認識されていること



## IF取得に向けて



- ◆ ポジショニング
  - （日本的，日本発の思想としての）TQMIにフォーカスをあてた，実学としての品質管理の研究論文を集める
  
- ◆ 編集体制の刷新
  - 編集委員会の国際化
  - 投稿のオープン化
    - 本会会員以外からも投稿できるようにする
  
- ◆ 刊行頻度
  - 当面年3回，将来的には年4回を目指す



# 具体的なアクションアイテム



- ◆ 編集委員会の増強
  - 国際レベルで著名な研究者を国内外から集め、編集委員会を組織
- ◆ 投稿システムの改良
  - 現在のTQS投稿用のウェブシステムを、ANQ以外の論文でも受け付けられるように適宜回収
- ◆ TQSを紹介するためのウェブページの充実
  - 英語
- ◆ 論文投稿数向上のための取り組み
  - 数年にわたり継続的に改善が続くことをアピール
  - 会員の皆様の強力なご尽力が不可欠



# ロードマップ



TQSのF取得に向けたロードマップ			2019				2020				2021				2022			
西暦			4.5.6	7.8.9	10.11.12	1.2.3	4.5.6	7.8.9	10.11.12	1.2.3	4.5.6	7.8.9	10.11.12	1.2.3	4.5.6	7.8.9		
学会年度			3Q	4Q	1Q	2Q	3Q	4Q	1Q	2Q	3Q	4Q	1Q	2Q	3Q	4Q		
大項目			48		49				50				51					
小項目																		
課題																		
理事会大筋合意				済														
編集体制改革	ポジショニング	日本的TQM にフォーカス		済														
	ボード編成	候補者リストアップ																
		依頼文書作成																
		候補者とのネゴ																
	発行頻度決定	年3回程度でよいか																
	予算	投稿時のチャージ問題																
編集手順改革	ルール	aknow ledgm ent																
	査読体制・プロセス																	
	ウェブシステム																	
論文集め	論文招待	特集号																
	CFP 作成配布																	
TQS新装開店	学会ウェブ																	
	改革後初出版																	
論文集めフォロー																		
ESCへの申請																		



ご清聴ありがとうございました